

自閉性障害児における他者への視覚的注意の方向付けに関する 応用行動分析的研究

—二者択一の選択場面における他者の視線方向の弁別—

Applied behavior analysis study on others visual attention direction in children with autism
: others gaze direction discrimination on alternative selection situation

○渡辺孝継・壽福亜耶

(立教大学大学院現代心理学研究科)

Takatugu Watanabe, Aya zyufuku

(College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

keywords: autism, eye direction, visual attention

問題と目的

自閉性障害における対人コミュニケーションの質的な障害の中の“視覚的注意”について、多くの研究者がアプローチしてきた (Baron-cohen, 1995; semju, 2006)。 Baron-Cohen (1995) は、自閉性障害者は視線方向を計算することにおいては障害を持たないが、注意の共有が困難であると報告している。

以上の特性は、応用行動分析学的な立場から検討され、その支援について研究がなされてきた (e.g., 畠中・山本, 2000; 松岡・小林, 2000)。その中でも畠中・山本(2000)や角谷・山本 (1997) は、応用行動分析の立場からアプローチして、自閉性障害児に参照的注視行動を獲得させることの重要性を示唆している。

しかし、角谷・山本(1997)や畠中・山本(2000)は、行動連鎖が形成されたのか、それとも他者の視線の有する機能が学習されたのかという点について、さらなる検討が必要であると示唆している。つまり、自閉性障害児が何のために他者の視線方向を利用したのかが明確である場面設定が必要であると推測される。

しかし、他者の視線方向のような“他者の反応”のみを手がかりにすると、場面によって使い分けることが困難になり、高橋 (2002) で指摘されているように、一方的な関わりが増加してしまうと推測される。

そのため、本研究では、自閉性障害児が他者の視線方向を弁別し、その視線方向とその視線方向以外の“物理的環境”を自身の利益のために利用することを目的とした。

方法

対象児 対象児は、A 大学の心理相談施設に来談している児童 1 名(B 児)であった。B 児は医療機関で自閉傾向を有すると診断されていた。B 児はコミュニケーションや社会性の指導・改善が主訴とされていた。

場面設定と課題 本研究の場面設定は、実験者と B 児の 2 名から構成された。本研究の課題は、机上に提示された青色の 3 つのカードと赤色の 3 つのカードの合計 6 つのカードのうち、実験者があらかじめ選択しておいた 1 つのカードを当てるという課題であった。この 6 つのカードは、赤色の(a), (b), (c) と青色の(a), (b), (c) と分かれしており、3 種類のカードが 2 色で用意されていた。

実験条件 本研究では実験者は、まず赤色の 3 つのカードと青色の 3 つのカードを右と左に色でわけ、机上に提示した。次に、B 児に選んだカードの名前が文字化された用紙 (選んだカードは a) を B 児に提示した。その後、実験者は自分が選択した色のカードの方へ視線を向け続けた。B 児が実験者の選択したカードを選択できた場合、本研究場面の直前と直後で行っているスゴロクゲームでサイコロを 2 回振ることができた。B 児が実権者の選択したカードを選択できなかった場合、スゴロクゲームに

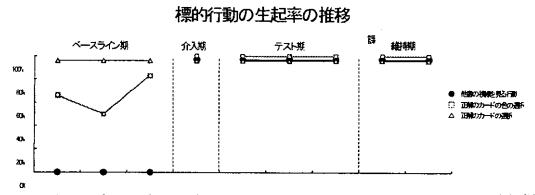
おいて 1 回休みとなった。

標的行動 本研究の標的行動は、(a)実験者の視線方向を見る行動、(b)実験者の選択した種類のカードを選択すること、(c)実験協力者が視線方向を向けている色を選択することの 3 点であった。

介入方法 本研究では、ビデオにより、標的行動の見本を B 児へ提示した。

結果の整理方法 本研究は、1 セッションで 6 試行課題を実施した。標的行動が生じた回数/課題実施数 × 100 を示した。

結果



ベースライン期では、標的行動(a)の生起率が 3 セッション全てで 0 % であった。標的行動(b)の生起率は、3 セッション全において 100% であった。標的行動(c)の生起率は、1 セッション目が 66%, 2 セッション目が 50%, 3 セッション目が 83% であった。

介入期では、全ての標的行動の生起率が 100% であった。

テスト期では、3 セッション全において、標的行動(a)(b)(c)の生起率が 100% であった。

維持期では、2 セッションにおいて、標的行動(a)(b)(c)の生起率が 100% であった。

考察

本研究では、ビデオによるモデル提示を行うことにより、見るべきポイントを明確にすることで、B 児は実験者の視線方向を確認して、実験者の提示するカード名と統合して実験者の選択したカードを選択することができるようになった。さらに、本研究場面においても参照的注視行動が成立したこと、角谷・山本(1997)や畠中・山本(2000)の示唆した自閉性障害児における参照的注視行動の機能の分析の一部を実践できたと推察される。また、視線方向のみでなく、選択されたカードも手がかりに用いたことから、様々な手がかりを統合することで高橋 (2002) の一方的な関わりを減少させることにつながる可能性を示唆した。

引用文献

畠中まゆみ・山本淳一 (2000) . 無発語自閉症児のリファレンシャル・ルッキング行動に及ぼす聞き手の条件の検討 明星大学心理学年報, 18, 41-601. (Hatanaka, M., & Yamamoto, J.)